

常識にこだわるな 常識は絶対でない

小田 善一郎

園芸人として60数年、歩んだ過去をふりかえって、言いたいことを2、3記すことにする。

第1話 pHのこと

植物を育てるには、pHをいくつにすれば生育がよいと、おおよその目安があり、それが常識になっている。この植物はアルカリでとか、酸性でとか、一般に言われている数値を念頭にして処置されることが多い。

今から30数年も前のことになるが、日産化学の子会社に日産緑化という会社があり、除草剤の散布作業が主な仕事であった。除草剤の使用が公害の問題で年々厳しくなり、それを回避するためにも除草剤の散布事業以外をしなければならなくなっていた。岩崎社長は、造園の事業を新たに取り入れるように考えた。それには園芸家の協力が必要になり、私の力を借りて来られた。わたしもホテル関係の会社の2、3の囑託をしていたので快く引き受けた。その会社に野村さんという化学専門の常務がおられ、その方と気が合い、次から次と新規の事業について検討をした。その中に、法面の緑化という事業が始められた。

簡単に言う道路を新設するとき生ずる法面をいかに緑化するかという仕事である。土壌なら今までと同じく繊維質のものと種子との混合の吹付で済むが、露出された岩盤も緑化しなければならない要望が出てきた。そこでいろいろな実験を始めた。勾配がゆるければ土の中に種子と繊維質を混合して厚めに吹き付ければ、発芽し立派な法面になるが、道路の法面は少しでも土地の買収面積を節約するためにかなり急な斜面が残されている。中には垂直なところもあり、まともな吹付ではほとんど落盤してしまう。どうしたら植生のできる基盤ができるか、ありとあらゆる知恵を絞ってテストがなされた。化学製品から繊維品まであらゆるものでテストが行われた。

そのうちにだめも承知でセメントを使う工法を試してみた。頭の中では、pHが8以上では発芽するはずが

ないと決めてはいたが、ために倍量のセメントを入れたものも作った。ピート、パークの混合したものの中にセメントを混入し、さらに過リン酸石灰を混合し、少しでもpHを和らげ、その中に種子を混入。コンクリートブロックの上に5cmの厚さで吹き付けた。

1週間のちに調査をすると、この堅い層から種子が発育しているではないか！ 驚いた。蒔く前にpHを調べたが、11.5のpHであった。まさか発芽するとは思ってもいなかったのが見事に発芽している。今までの常識を完全に覆してしまった。その後、効果の確認のために水を放水し、流出の試験を行ったところ、さすがセメントの使用だけに、流出はゼロであった。これなら十分に実用化できると喜びあった。何とか実用上差支えないものが出来上がった。工法の名は私と野村さんの頭文字をとって「ON工法」と名付けられた。

吹付の専門会社東興建設に施工工事をしてもらうことにした。法面工事のほとんどが辺鄙な山間地帯が多く、特殊な機械が使用されるとともに特殊な技術が要求されるため、専門の会社に任せることにした。垂直の岩盤の上を緑化するという今までは想像もできなかった工事ができるので、道路公団が喜んでとりあげてくれ、たちまちに全国で施工され始めた。1㎡の単価も高価であったが、年間かなりの売り上げの工事をするようになった。

この時の実験でpHが11.5まで発芽することが分かった。pH12以上になると発芽しない。緑化工は農学部でなく林学部の仕事で、会長は東京農業大学の倉田教授であった。倉田会長も驚かれ、学会でも注目をされ、是非にと発表をする羽目になった。pHというものは大体7を中心に考えられており、8では極端なアルカリで、それ以上はまず生育が不可能ということが常識であった。ましてやpH10以上は念頭になかったのが常識であった。まさか11.5で発芽しようとは誰も考えられなかった。

わたしは洋蘭の栽培が本命であるが、カトレアの栽



Lo.Hannyahime' Shaouten' AM-JOS

培でも無茶苦茶をしている。カトレアなどの着生蘭の植え込み材料は、ミズゴケか、パークで植えるのが常識であった。パークはパインカレッドウッドを使われていたが、私は発酵パークを使い一時は成績が良好であったが、どうも製品にむらがありすぎ、また腐敗が早すぎるために、これに代わるものを考えていた。無茶を承知で燻炭を使ってみることにした。これだけでは乾燥が激しいので、中にピートを混入し、植えてみた。鉢もプラスチックを使い、6号から8号鉢を使って見た。結果は上々で、今まで1花梗に2~3輪しか咲かなかったのが3~4輪も咲き始めた。今まで見られた花芽の傷みがなく、多くの花芽が咲くようになった。極端な粗放栽培である。燻炭は初殻を蒸して作るが、初殻はただで手にはいる。燻炭はドラムカンで簡単にできる。コンポスト代がただ、いわば最低のコストでの栽培である。燻炭のpHでも極端なアルカリだ。カトレアがアルカリに強いことはわかっているが、これほどのアルカリに耐えるとは想像もされなかった。生産費が下がりすぎると、生産のプライドが失われてしまう。その点ではまずいことをしていると後悔もしている。

次に、常識破りのことを公開しよう。蘭の強敵はウイルスである。ちょっと油断をするとウイルスで全滅することもある。ウイルスにはいろいろの種類があるが、蘭には軽度のものも多い。花卉に簡単に筋が入るものもある。これをカラーブレイキと言っているが、これらの鉢にコーヒーかすを入れておくとその症状が消える。完全に退治するのかマスクするのかわからないが、とにかく消えてしまう。実用上は問題ない。昔ココアのかすで実験したこともあったが、ココアのかすは補給が続かず途中でやめてしまったこともあったが、今回はコーヒーかすなので、十分に補給できるし、安心して使える。馬鹿な奴のばかな実験と思っ

さってもいいが、植物の成分には計り知れないものが潜んでいる。このように常識というものは意外とあてにならないものである。

第2話 植物公園と植物園

園芸が好きな外国人たちは、東京に来ると必ず次のような質問をする。ボタニカルガーデンに行きたいがどこにありますかと。そのような問いかけをされると一瞬戸惑う。植物公園はあるが、植物園は東大の小石川植物園しかなく公開されている植物園は皆無である。彼らは植物公園では物足りず、専門家がいる、植物見本や腊葉がふんだんにある植物園を言っているのだ。この時ほど、一園芸家として恥ずかしさを感じることはない。

今からほぼ30年も前になるが、園芸文化協会の仕事をしていた時、日本でもチェルシーショウのようなものができないものかと、皆で考えていた。幸いに新宿御苑と交渉し使えることになり、あの広場を使ってチェルシーもどきの大会を開催したものであった。確か、3回開催したが、3回で終わってしまった。今思い出すと本当に惜しいことをしたのだと後悔をする。

あの当時は園芸文化協会には植村氏、村田氏、岩佐氏らのそうそうたる方がいて、会長は原参議院議長だった。開催に参加した会社は、種苗会社はもちろん、造園会社からあらゆる種目の植物の団体や会社が参加した。開会の初日には皇太子殿下が美智子妃殿下と来られ、ゆっくりと園内を回られ、ゆっくりとご挨拶をしたものであった。新宿御苑は、日本の園芸の発祥の原点である。福羽発三伯爵が初代の園長になられ、そこで学ばれた方々の中に次の日本の園芸を背負っていかれた方々が多く、日本の園芸の原点は新宿御苑であったともいえよう。ここには明治時代に建設された温室の初期のものからフレームまですべてが残っていたが、いつのまにか壊されてしまい跡形もなくなってしまった。新宿御苑は所属官庁が変わりすぎた。最初は宮内庁の所管、その後めまぐるしく変わり、今では環境庁の管轄になっているが、園芸家の中に行政力のある方がおられたら、御苑の一部だけでも文部省の所管のもとに植物園ができたのではなからうか。特に終戦のときなど、その可能性があったのではなからうか。都内のど真ん中にあり、100年以上も育った植栽は素晴らしい、植物園としては申し分のない場所だと、だれしもおもわれると思う。夢のような話だが、あの温室を中心に植物園建設構想でもしたらいかがなものだろう。